

ここに九州王朝ありきⅡ 2026年7月19日(日) 服部静尚

第7回 仏教と九州王朝 法隆寺薬師像のなぞ

- 1、仏教の経典は「悟りをひらく」ノウハウを説く
- 2、筋違いの四天王へ祈願するおかしい厩戸皇子
- 3、推古天皇は女性蔑視の仏教を受け入れられない
- 4、法隆寺釈迦三尊像と薬師像の光背銘
- 5、薬師寺東塔療管銘

年度計画

第1回	盗まれた天皇陵 巨大古墳のなぞ	2026年 1月18日
第2回	『日本書紀』と『続書』 古代の二倍年暦	2026年 2月15日
第3回	『古事記』北太安萬侶 国生み神話他	2026年 3月15日
第4回	鏡と庄内式土器 空白の3世紀	2026年 4月19日
第5回	瓦と須恵器 考古学の解釈に異議を申す	2026年 5月17日
第6回	いつから天皇になったのか 法隆寺薬師像のなぞ	2026年 6月21日
第8回	九州王朝の天皇 船王後襲誌などより	2026年 8月16日
第9回	倭国が日本国となった理由 筑紫都督倭国王の存在	2026年 9月20日
第10回	高市皇子の死と神護	2026年10月18日
第11回	九州年号が 一元史観を駆逐する	2026年11月8日
第12回	黒幕に祭り上げられた 藤原不比等	2026年12月20日

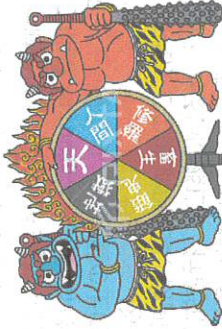
1、仏教の経典は「悟りをひらく」ノウハウを説く ⇒ こんな難しい話、初めての人に通じますか？

仏教が生まれたインドでは、永遠に輪廻が繰り返されると信じられていて、この輪廻が苦痛だったようです。

悟りをひらけば、この苦痛の輪廻から脱出できる。解説できる。
「悟りをひらく」にはどうすればよいか、これを教えるのが仏教経典です。
仏教の目的は「悟りをひらく」ことになります。
「悟りをひらく」と「ほとけ＝如来」になります。
つまり「悟りをひらく」ことは、「成仏」することと同じ意です。
そして、「成仏」すれば輪廻転生から離脱＝解脱したことになります。

【どうしたら、悟りをひらけるか】のノウハウを示しているのが仏教経典。

「人間50年 下天のうちに比ぶれば夢・幻の如くなり」下天での寿命は5百才、1日が人間世界の50年＝912万年。
そして、仏の寿命は無限（無量寿）。それを考えると「色即是空（物質的存在は、実は実体が無い）」



大乗仏教とは出家者に限らず在家者を含めた一切の衆生の救済を掲げています。

『妙法蓮華経』鳩摩羅什漢訳（400年）によると、
釈迦仏は一切衆生がすべて成仏できると説きます。
一般には、『華嚴経』や『無量寿経』
が**大乗仏教の代表経典**とされますが、
私は、『法華経』が**大乗仏教の根本**
経典と見ています。

1、仏教の經典は「悟りをひらく」ノウハウを説くのだが その仏教はいかに伝わったか

『日本書紀』は、欽明13年（552）に百済王が仏教經典を伝えたとする。

是法、於諸法中最為殊勝、難解難入、周公・孔子尚不能知。

此法、能生無量无边福德果報、乃至成并無上菩薩。

如人懷隨意宝、遂所須用盡依情、此妙法宝亦復然、祈願依情無所乏。

金光明最勝王經、於諸經中最為殊勝、難解難入、聲聞獨覺所不能知
此經、能生無量无边福德果報、乃至成并無上菩薩。

如人室有妙宝篋 隨所受用悉從心 最勝經王亦復然、福德隨心無所乏。

金光明最勝王經の教えは①最も優れた教えであり、全ての国が信仰する。

②この教えによって福德・果報・悟りが得られる。

③祈願すれば何事も成就する。

仏教では珍しい 現世利益 ※を語っている。

※他に、薬師經や法華經薬王菩薩本事品・觀世音菩薩普門品がある。

お釈迦様は国を棄て妻子を棄てて出家したのに、護国するとは、
仏教として珍しいお経です。

しかし、初めての人に受け入れてもらうには相応しい。

ただし、実際には421年に曇無讖が漢訳した「**金光明經**」が伝わったと考えられる。

この部分は、
703年に義浄が漢訳した
「金光明最勝王經」
寿量品・四天王護国品
からの転用です。

しかし、七〇三年はおかしい。

2、筋違いの四天王へ祈願するおかしい厩戸皇子

用明2年（587）蘇我・物部戦争

この時、**厩戸皇子**は未だ15～16歳であって、蘇我馬子軍の後方に随っていたが、「このままでは敗戦する、願をかけなければ」と、すばやく白膠（ぬりで）の木で

四天王像を彫り、これを髪の上に置いて、

「今、もし我らを勝たせたら、必ず護世四王のために**寺塔を建てる**。」と誓った。

（中略）この戦いの結果、物部守屋の子や一族は葦原に逃げ隠れて、姓を改め名を換え、あるいは逃亡し、行き先不明になった者もあつた。乱を平らげた後、**摂津国に**

四天王寺を造り、（中略）蘇我馬子は飛鳥の地に法興寺を建てた。



『金光明經』の教えに従えば、

戦勝を四天王に祈ってもダメ。**金光明經**を受持し**流布**すれば
四天王が護ってくれるわけで、この祈願は筋違い。

勝たせてくれたら
必ずや、護世のため
に寺塔を建てる



421年曇無讖訳『**金光明經**』四天王品

世尊（釈迦）が四天王に対して、「人王ありて、この金光明經を恭敬供養するならば、汝ら（四天王）はこれを守護せよ」と説く。これに対して四天王は「国土のいかなる場所であっても、金光明經が流布し受持されるなら、必ず国王と人民を護り、憂苦を遠離し寿命を増益（ぞうやく）し安穩ならしめる。もし隣国の怨敵が国土を侵攻するなら、夜叉諸神と共に形を隠して援助し、降伏させろ」と誓うというものです。

ちなみに、421年曇無讖訳『金光明經』の内容は次の通りです。 林嶋宇著「宋代天台教学の研究」より

- ①序品： 釈尊が「諸経の王である金光明經を聞き、受持し誦誦するものは、四方四仏、諸天に護衛される」と説く。
 - ②寿命品： 釈尊の本来の寿命が無辺無量であることを説く。
 - ③懺悔品： 罪過の告白によって、未来に生ずる悪業をも防ぐのが、金光明懺悔の功用である。
 - ④讀歎品： 信相菩薩は国王であつた過去世で、諸仏を讀歎したので、金光明懺悔法を憶えられた。
 - ⑤空品： （懺悔品は破惡、讀歎品は生善、）空品は破惡生善を導成し、金光明懺悔法を理論付けする。
 - ⑥四天王品： 金光明經を受持恭敬供養する人王と國を、四天王が安泰守護すると誓う。
- 703年義浄訳『金光明最勝王經』では、「四天王觀經人天品」および「四天王護國品」に拡大増幅されて、四天王が布教する。
- ⑦大弁天神品： 金光明經を講説する者に、大弁天女が大福德の報いを与えると誓う。
 - ⑧功德品： 金光明經を講説する者に、功德天女（吉祥天）がさらに広めるための財物を与えると誓う。
 - ⑨堅牢地神品： 金光明經を講説する者に、地神堅牢が土地を豐作にし、衆生を快樂に過ごさせると誓う。
 - ⑩散脂（パンチカ）鬼神品： 金光明經を講説する者に、鬼神が追隨し護衛すると誓う。
 - ⑪正論（しょうろん）品： 人王が正法をもって治世し、仏法を護持すれば、諸天が国土國民を護持すると、釈尊が説く。
 - ⑫善集品： 仏の過去世である善集王は「治世正論」を行ったと説く。
 - ⑬鬼神品： 金光明經を流布する者を守護した諸天も利益を得ると説く。
 - ⑭授記品： 釈尊は、聽經する信相菩薩とその息子二人に、授記（未来に成仏する予言）を与える。
 - ⑮除病品： 仏の過去世である流水長者子が、国内全ての病人を治した例より、医王と經王の一致を説く。
 - ⑯流水長者子品： 流水長者子が瀕死の魚に水と食を与え、金光明經を囑讀した所、魚が三十三天に。（放生会）
 - ⑰捨身品： 釈尊の過去世において、自らを餓虎に投身し、菩薩行を成就した因縁を説く。
 - ⑱贊仏品： 菩薩たちが釈尊を讀歎し、釈尊は金光明經を聞く者皆が無生法門に入れると説く。

蘇我物部戦争の約80年後、四天王護國の信仰が芽生えた。白村江戦の直後の新羅で四天王寺建立

◆三国遺事（13世紀末に成立）によると、
(668年)唐の兵がへまさに新羅を襲おうと謀っていたので、王は兵を動員した。明年(669年)唐の高宗が新羅の重臣を呼び「新羅は我が国の軍を請うて高句麗を滅ぼしてからは唐を書する」と追求し獄に入れ、兵50万をして新羅を討とうとした。この時、唐に留学中の僧がこの事情を聞き、新羅王に報告した。王が群臣を集め防禦策を聞いた所、近頃明朗法師が龍宮に入り秘法を学んできたので、法師に策を聞くことになった。法師は狼山の南の神遊林に、四天王寺を建てて道場を開設すればよいと奏上した。
唐兵が国境に迫り逼迫したので、彩色の絹で寺をつくり、草で五方に神像をつくり、法師を首席に密教僧12人で秘密の術法をつくと、交戦前に唐船が全て沈んだ。後に、寺を改めて建て四天王寺とした。その後671年に再び唐が5万の兵で攻めたが、この術法で敵（唐）船は沈没した。
高宗に獄中の新羅重臣は『（四天王寺の存在を隠して）新羅では唐の恩で三国統一できたので、狼山の南に天王寺を建てて高宗の万寿を祈っている』と報告した。
「天王寺」は「皇帝の万寿を祈る寺」

703年義浄訳で四天王品が拡大増幅された後、四天王護國祈願が『金光明最勝王經』に基づき行われる。

◆類聚（るいじゆ）三代格によると、宝龜5年（774年）の太政官符
大野城四王院は新羅との軍事的緊張を背景に、国家鎮護を目的として設置され、ここで行なわれる四天王法については、「僧4人が四天王の各像の前で、最勝王經四天王護國品によって、昼は經巻を読み、夜は神咒（かじり）を誦（となえ）ること、春秋の四天王修法を行なうこと、供養の布施は大宰府の庫物ならびに正税を用いること。」

厩戸皇子による四天王寺創建は、720年『日本書紀』編纂時の創作の可能性が高い。

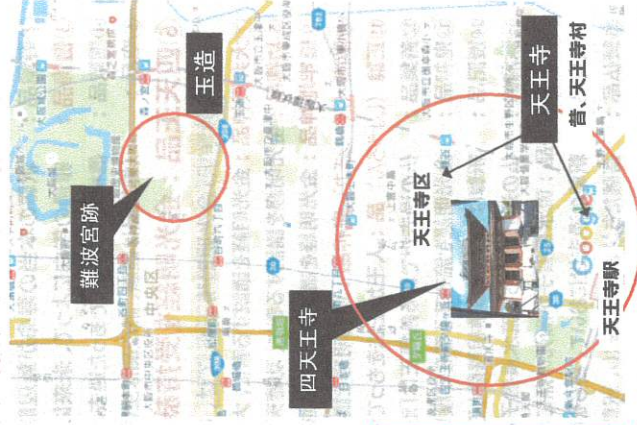
620年頃に創建された天王寺は、653年に現在の地に移設され、『日本書紀』によって四天王寺と偽装された。

- ①日本書紀（720年成立）「平乱の後に、摂津国に四天王寺を造る」
- ②上宮聖徳太子伝補閑記（成立不詳）「玉造の東岸上」〔在東生郡〕
に四天王寺を造る。～四天王寺は後に荒墓村に遷す」
- ③聖徳太子伝暦（成立不詳、917年説992年説がある）
「玉造の岸上に造る、四天王寺の基始めなり」
- ④四天王寺御手印縁起（9世紀前半～1007年）「丁未の歲（587年）に
始めて玉造の岸上に造り、改めて此の地に鎮祭する、
癸丑（653年）の歲に壞して荒陵の東に遷す」
- ⑤扶桑略記（1094年成立か）「丁未の歲（587年）に始めて玉造の岸上
に建てて。癸丑の歲（653年）に壞して荒陵東に移す」

前期難波宮の下層遺構から（四天王寺
創建瓦と同じ）瓦が出土し、それらは内裏
地区、大極殿地区、東部官衙地区、西部
官衙地区、宮西南隅という広い範囲である。

四天王寺の創建瓦

～620年頃～
若草伽藍と同じ
木型で作られて
いる。
木型（范）の
傷み具合から、
こちらの方が後で
作られたと見られる。



3、推古天皇は女性蔑視の仏教を受け入れられない

ご存じでしょうか？全国に建立された「国分寺」と「国分尼寺」、正式名称は、

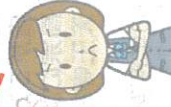
『続日本紀』国分寺建立の詔：天平13年（741）僧寺必令有20僧。其寺名爲金光明四天王護國之寺。
尼寺10尼。其寺名爲法華滅罪之寺。～其僧尼。毎月八日。必應轉讀最勝王經。

国分尼寺は、「法華滅罪の寺」です。国分尼寺は法華經に基づくお寺。

◆法華滅罪とは何か？ 仏教の最終目的は悟りを開くこと＝解脱＝成仏です。
しかし、女性には成仏できないとされていました。「女性が男性に生まれ変わる
ことによって成仏できる」と救済する話が法華經に出ています。

つまり、**女性には女性であることが罪**であって、その罪を法華經によって救済することなのです。

女性の推古天皇が、
こんなの受け入れられますか？



釈迦入滅後、インドの女性蔑視思想で、女性には「救いがたき者」「仏になれない」とされた。

『中阿含經』一女人五障説（女性が持っている5つの障害。女性には成仏できない。）

女性には、梵天、帝釈、魔王、転輪聖王、仏の五つになれない

『五分律』一八敬法 比丘尼は具足戒を受けて100歳になっても、新米の比丘に敬れし立って迎え合掌し恭敬すべし。

一若不聴女人出家受具足戒、佛之正法住世千歳。今聽出家、則滅五百年。もし、女人出家を認め
なかったら、釈迦（紀元前7～6世紀）の正法は千年続いたが、女人出家を認めたため五百年で滅ぶ。

正法：正しい教えがあって悟りを開くものがある一千年、像法：仏法はあるが悟りを開くものはいない一千年、
末法：釈迦の仏教の効力が無くなった時代一千年

法華滅罪は、『妙法蓮華經』 提婆達多品 第12品 に見える。



提婆達多（だいはだつた）とは、元、釈迦仏の弟子で、後に背反して仏教界での大悪人。釈迦の弟子となったが、驕慢の心で分派し新しい教団をつくった。靈鷲山の山頂から大石を落とし、釈迦の足の指から出血させた。象を酒に酔わせて、釈迦を襲わせた。

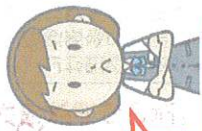
◆提婆達多品の前半は、悪人成仏の話

悪人（提婆達多）は前世で、釈迦に法華經を与えた仙人だった。
だから悪人（提婆達多）でさえ未来において成仏できる。

◆提婆達多品の後半は、變成男子・龍女成仏の話

本来、成仏できない女性であっても、男性に生まれ変わって成仏できる。

「悪人」と「女性」を同列で扱っている！



男に生まれ変わらないと成仏できないと、これ受け入れますか？

◆舍利弗（釈迦の弟子）の言葉で、女性とは差別されるものとした上で、龍女が皆の前で突然男子に變成して成仏する姿を描く。本来、成仏できない女性であっても、男性に生まれ変わって成仏できるとする。

◆サンスクリット原典の現代語訳では、「さて、その時、海龍王の息女は、一切の世人の眼前で、しかも舍利弗の眼前で、その女性器官を内蔵せられ、そして男性器官を現出せられ、そして菩薩に成った我が身を衆目にさらして見せる。」法華經の原典も、女性とは成仏できない前提で書かれている。



『法華經』は一切衆生が成仏できると云う。本来、女人は成仏できないが、變成男子して成仏できる。



尚、言い訳したいになりますが、これは釈迦の真意では無いと、私は考えています。

4世紀、鳩摩羅什が漢訳した『維摩詰所説經』いわゆる『維摩經』に、釈迦の男女感が見えます。

舍利弗が天女に聞く「あなたはどうして女身を転じて男の身にならないのか」天女は「幻に一定の特性はない。なぜそれを転ずる必要があるのか」と答え、その神通力で、舍利弗を天女に、自らを舍利弗にならしめ舍利弗に「どうして女身を転じて男の身にならないのか」と問う。舍利弗は天女の姿で「私は女人の身となったが、どうしてこうなったか解らない」と、天女が言う「もし、あなたが自分の女人の身を転ずることができるなら、すべての女人も女身を転ずることができるはず、あなたが女でないのに女人になつたように、すべての女人も同じです」と。「女身を現しているが女ではない。仏は一切のものは男に非ず、女に非ずと説いたのです。」

『法華經』には、提婆達多品以外にも女性蔑視が垣間見られる所が見えます。

◆法華經 第八 五百弟子受記品（ごひゃくでしじゆきほん）

富楼那弥多羅尼子（ふろうなみたろにし）という優れた説法者がいて、空の教えにも通曉し、明瞭に説き適確に語り、幾千万億の人びとを教化した。彼は限らない時を経て法明如来という名の仏になるであろう。その仏はガンジス川の砂の数にも等しい三千大千世界を一仏国土とし、その国土は平坦で山や谷はなく、地は七宝からなり、天の宮殿は虚空に浮かび、その国に悪はなく女人はおらず、淫欲がないであろう。神通力を得て身体から光を放ち、自由に飛ぶことができる。～

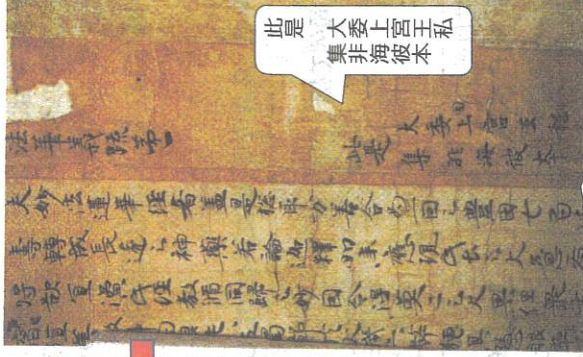
◆法華經 第二十三 棄王菩薩本事品

遠い昔、日月浄明徳如来という仏がいた。その仏土には女人はおらず、また地獄、餓鬼、畜生、阿修羅の類もなく、地は平坦で瑠璃でできていた。日月浄明徳如来は一切衆生喜見（しゆじようきけん）菩薩と会衆に法華經を説いた。

『法華經』は提婆達多品で曲がりなりにも女性救済する。しかし、当時の『法華經』にはその部分も無かった。

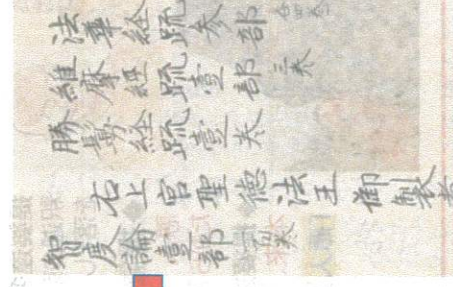
これは吉蔵（五四九く六三三年）の『法華義疏』などを、倭国から渡った僧侶が書写し、倭王が自家の書架に収蔵したもの、を、貼り合わせて作られたものだ。
ここには提婆達多品は無い。当時の倭国に渡った『法華經』は女性救済が無いのだ。

鳩摩羅什漢訳（四〇六年）には提婆達多品は無い。つまり、右の『法華義疏』は鳩摩羅什訳を基にしている。



此是大委上宮王私
集非海彼本

冒頭の貼り合わせは題名「法華義疏第一」だが、本文末尾には「法華疏第一」とある。
 『法華義疏』吉蔵撰、別に『法華疏』もある。



上宮聖徳法王御製者とされる『法華義疏』を、古田武彦氏が京都御所で撮影・観覧されたところ

厩戸皇子が三經義疏を著したとされる。

法隆寺伽藍縁起并流記資財帳
 天平19年（747）作成
 寛政7年（1795）写本

紙質違うものを貼り合わせている。筆跡も異なる。

では、無量寿經（いわゆる阿弥陀經）では女性も救済されるのでしょうか。
無量寿經では「女人往生」、「女人成仏」ではない。オブラートに包んだだけ。

- ◆ 支婁迦讖（しるかせん）訳『仏説無量清浄平等覺經』147年頃
- ◆ 康僧鎧（こうそうがい）訳『仏説無量寿經』252年頃、『阿弥陀經』とも言ふ

法蔵菩薩（成仏する前の阿弥陀如来の名）が48願の成就を果たして、極楽浄土に阿弥陀如来として出現し、衆生を極楽浄土への往生に導くと説く。往生した衆生は阿弥陀如来の元で成仏を目指す。

往生とは：浄土に往き、過去の業の力で生まれること。阿弥陀仏の浄土・極楽浄土に化生すること

女性の救済は、『無量寿經』で、「臨終に阿弥陀仏を念じれば、極楽浄土に男性として迎えられ」と、これが往生です。

男に生まれ変わらなと成仏できないのは同じですが、極楽浄土への往生では、女性も救済されます。



（『日本書紀』によると、）

640年になって『無量寿經』が説かれ、652年には内裏で讀じられます。

無量寿經は朝廷に受け入れられ、おそらく女帝でも受け入れられたのでしよう。

35願：私が仏になる時には、あらゆる世界の女性が我が仏名を唱えて、自ら女性であること厭惡する場合、寿命が終えた後に再び**女性に生まれたいようにします**。そうでなければ、私は仏にはなりません。

18願 念仏往生の願：私が仏となる以上、深く私の誓いを信じ往生を願って私の名を十遍称えたのに、往生しないということがあれば、私は仏になるわけにいかない。

追加資料

『法華経』は一切衆生が成仏できると云う。=大乗仏教

高名な学者 I氏との議論：

【私からの問い】 法華経の提婆達多品が説く変成男子によると、女性は本来成仏できない存在であることを前提として

いる。当時の女性蔑視の仏教を推古女帝が興隆させるのだろうか。

【I氏の答え】 法華経の提婆達多品は女性を救済するものである。推古天皇が女性弁護の勝鬘経を講経させたこと、

『勝鬘経義疏』が厩戸皇子作、勝鬘経により推古女帝の即位は保証される。

『勝鬘経』は聖徳太子が推古天皇に講義したとされることより、女性の救いを説いた経典だといわれることがあるが、勝鬘夫人は釈迦如来の教えを代弁する人物です。比丘よりも優位に立つ優婆夷の象徴として勝鬘夫人を語り手としているが、とくに女性の救いが説かれているわけではない。（以上、大角修『維摩経・勝鬘経』角川文庫より抜粋）

仏教教団は、比丘（男の出家者）・比丘尼（女の出家者）・優婆塞（男の在家信徒）・優婆夷（女の在家信徒）で成り立つ。元々、この内で悟りに至ることができるのは出家者のみとされていた。在家の者は出家者にお布施をすることで功德を積み、現世で病氣や貧しさに苦しまず、来世では天界に生まれること、女は男に生まれること等を願う。そうすることによって、もっとも貴い比丘になるかも知れないと。（小乗仏教の世界）このような序列の中で、在家の女性は悟りから最も遠い位置に置かれた。（以上、大角修『維摩経・勝鬘経』角川文庫より抜粋）

対して、『法華経』では一切衆生が成仏できると説きます。

優婆夷の立場である勝鬘夫人（女性）が釈迦と同等の知恵をもつ者としてあつかわれている『勝鬘経』や、優婆塞の立場にある維摩詰が釈迦の弟子の舍利弗などの修行を批判し「もう維摩詰には会いたくない」と言わせるほど完膚なきまでに論破し、文殊菩薩と空の考え方について問答を行う『維摩経』は、『法華経』を補強する経典と言えます。

仏教を興隆させた 7世紀初頭の倭王は推古女帝でなく、（隋書が記す）男帝に違いない。

- ◆『隋書』には、開皇20年（600）倭王姓阿每、字多利思比孤、號阿輩雞彌 遣使詣闕。上令所司訪其風俗。使者言王妻號雞彌、後宮有女6・700人。名太子為利歌彌多弗利。～有阿蘇山、其石無故火起接天者～大業3年（607）其王多利思比孤遣使朝貢。使者曰聞海西菩薩天子重興佛法。故遣朝拜兼沙門數十人來學佛法
- ◆『日本書紀』には、604年に制定された十七条憲法に、篤く三宝を敬へ、三宝とは仏・法・僧なりとある。
- ◆発掘された瓦より、600年前後を創建年とする初期の寺院が、奈良・大阪および北部九州を中心にして、全国に分布する。



推古天皇：欽明天皇の皇女で、母は大臣の蘇我稻目の女の堅塩媛キタシヒメ。

諡は額田部皇女ヌカタバヒメ、和風諡号は豊御食炊屋姫尊トヨミケカシキヤヒメ。

日本史上最初の女性天皇として、593年～628年在位。

甥の厩戸皇子に一切の政務を執らせて国政をすべて委任した。

厩戸皇子：推古天皇の皇太子で摂政として、冠位十二階・十七条憲法を制定。

推古天皇の『日本書紀』の偽装だった。『日本書紀』の偽装だった。『日本書紀』の偽装だった。



阿每多利思比孤：『隋書』には倭王は男性、兄弟統治をしていたとある。

大業3年（607）多利思比孤の遣使が朝貢。「海西の菩薩天子が重ねて仏法を興したと聞いたので、遣使を朝拜させ、沙門數十人を送り仏法を学ばせたい。」その国書に曰く「日出づる処の天子が書を致す。日没する処の天子はつつがなきか」皇帝これを見よるこばず。

604年、厩戸皇子が自ら制定したとされる 十七条憲法とは、

- 一日 和を以て貴しと為す。たが忤うこと無きを宗とせよ。人皆党あり又達するもの少なし。故に君父に順わず、隣里に違ふ。しかし上和らぎ下睦ぶと事理おのずとかよう。何事も成すことができる。
- 二日 篤く三宝を敬へ、三宝とは仏・法・僧なり
- 三日 詔を承れば必ず謹め、君を天、臣を地とす
- 四日 群臣百寮、礼を以て本とせよ
- 五日 褻を絶ち欲を棄て
- 六日 勸善懲惡
- 七日 人各の任有り
- 八日 群卿百寮、朝早く出仕し、おそく退出せよ
- 九日 信は義の本なり
- 十日 人の違ふ所を怒るな
- 十一日 賞罰を明瞭にせよ
- 十二日 国司・国造は私税を徴収するな、国に二君無く、民に両主無し
- 十三日 任官された者は、同じく職掌を知れ
- 十四日 群臣百寮、嫉み妬むこと無かれ
- 十五日 人に私心あれば必ず恨み有り、心残りあれば和さず、私心が公を妨げ、制に違え法に害する。
第一条で上下和譜としたのはそのためだ
- 十六日 民を使うに時を選べ
- 十七日 事を独りで判断せず衆議せよ

仏教が一番

天子が一番

残りの12条は、官僚の行動規範・服務規程

これは北周の『六条詔書』（544）を手本とする。太祖（宇文泰）が、地方長官へ課した規範書。百官に習誦させ、地方長官任命の必須要件とした。

他に、『韓非子』の法治主義も取り入れている。

天子が一番

歴史学者の見方 ① 十七条憲法は7世紀初頭の時代に合わない。大宝令成立以後のこと。 ② いやいや、天武・持統の時代ではおかしい。7世紀初頭で良い。

- ①【津田左右吉】独断を戒め衆議によるべしとは、蘇我氏専権時代には相応しくない。推古朝当時に「国司・国造」という連称も考え難い。
【直木孝次郎】推古朝当時に国民の全てが天皇を主とするほど絶対的な地位にはない。公地公民が実施された天武持統朝ごろの偽作と考える。
- ②【瀧川政次郎】「東方に迫りつつある隋の圧力」を前に、官僚政治に基づく「強力なる中央集権的国家を建設せんとする思想が生まれ」これが憲法成立の背景だ。
- ③【二葉憲香】第二条の「篤敬三宝」という仏教的立場は、僧尼令を成立させた天武・持統朝の仏教感とは合わない。

宗教学者の見方 ③「仏教が一番」は僧尼令の7世紀後半にも合わない。

その上、女性である推古天皇が、女性「救いがたき者」「仏になれない」とする提婆達多品の無い『法華経』までの仏教を受け入れるだろうか？ 仏教が一番とするとどうなるか？ 推古女帝が仏教を擁護することも、十七条憲法を作らせることもありえない。

つまり、『日本書紀』が描く世界と別世界の十七世紀の十七条憲法

十七条憲法は、九州王朝の皇太子が制定したものだ。

十七条憲法に見える倭国の東進政策

◆役人の行動規範の条文の中で、注目すべき条文◆

- 5条：（前略）百姓の訴えは一日に千件ある。永年にわたり訴訟を治める者は利益を得る事を常にしている。
隋略を貰って裁きをゆるしてはならない。
- 11条：手柄と過ちをはっきり見ぬいて、罰と賞をきちんと当て嵌めなさい。日頃は手柄でもないのに賞を与え、
罪も無いのに罰しているが改めよ。
- 13条：任命された役人は、職務・役目をわきまえよ。或る人は病氣になり、或る人は遠國に派遣され、
一時任務を外れる事もあるが、帰任した日から常どおり役目を果たせ。

既に、役人による政治を経験している。

部分的に律令政治が始まっていた。
九州島内での話。

中国の仏教事情	日中関係	日本書紀・統紀
581年 隋の菩薩天子 (仏教治国策) 国家仏教	600年 遣隋使 607年 遣隋使	604年 十七条憲法
637年 唐の道僧格 (遣先佛後)	630年 遣唐使	624年 46寺、僧尼1385人

仏教治国策で、
この律令政治を、
十七条憲法で、
全国展開へ。

沙門を隋に派遣し、佛法を学ばせた理由

現世利益を目的とした仏教受容から、

隋の漢民族統治のための仏教治国策を学ぶ。

国家仏教を学ぼうとした 全国統一した隋の漢民族統治策

大業3年（607） 其の王多利思比孤は使を遣わして朝貢した。使者曰く、
「海西の菩薩天子が重ねて佛法を興すと聞く 故に朝拝に併せて 沙門數十人に佛法を学ばせたい」
其の国書に曰く「日出処の天子が書を致す。日没する処の天子はお変わりありませんか」云云。

菩薩天子：天子であり 現実世界の支配者であり、衆生を救う菩薩でもある。信仰の救世主

『隋書』・『日本書紀』より、

- ①筑紫から秦王国、さらに東に10余国を経て
海岸に達する。都は筑紫だが、
倭王は難波に遠征滞在していた。
- ②倭王遣使の目的は、沙門に仏法を
学ばせること。
- ③隋書の兄弟統治は、推古紀の摂政
の形にあった。

1、沙門を隋に派遣し、仏教治国策を学んだ。

楊堅・煬帝は菩薩天子、仏教治国策を採っていた。

2、十七条憲法が示す倭国の仏教治国策。

承詔必謹と篤敬三宝要求の矛盾は、菩薩天子でのみ解消。

3、十七条憲法が示す倭国の東進。

十七条憲法は、実施済みの役人業務の心構えを示す。

4、素弁連華文瓦の分布に見える倭国の東進。

5、厩戸のモデルは弟王だった。

全国に分布する「七世紀初頭の寺院」

素弁蓮華文瓦の分布に見える倭国の東進。



「素弁蓮華文軒丸瓦」を創建瓦とする「寺院」は79寺。
加えて、寺院以外の遺跡が、福岡県・佐賀県に計12カ所。

素弁蓮華文軒丸瓦は、我が国に瓦が伝えられた当時の初期瓦。
全国に分布する素弁蓮華文軒丸瓦は、600年前後に全国に寺院が建立されたことを示す。



九州を本拠地にしていた倭国が、
隋の楊堅の仏教治国策をまねて、
全国を直轄統治のために東進。

6世紀末～7世紀初頭にかけて

同じ文様の瓦を持つ寺院が、全国一斉に建造される。

⇒ 国家権力の意図的政策と考えるのが妥当。

「河内・大和」と「北九州」が2大中心地

十七条憲法を作ったのは、兄弟統治をしていた弟王ではないか

隋書が云う
兄弟統治

倭王は天をもって兄とし、日をもって弟とする。天が未だ明けぬ時出でて政を聞く。
日が出づると理務を停めて、我が弟に委ねる。

推古紀は
摂政を云う

(日本書紀は兄弟統治に触れない)

厩戸皇子を立て皇太子とする。よって攝政を録べ、以って萬機をことごとく委ねる。

しかし、『日本書紀』のこの部分は虚偽



万機（政治上の多くの重要な事柄）をことごとく委ねるとあるのに、多くの詔
(当然推古天皇の命令) が出されている。

- ③ 三宝の興隆、⑥ ⑧ ⑨ ⑩ 新羅への派兵、⑪ 朝廷での礼法、
⑬ ⑭ 仏像製作、⑮ 經典講義、⑯ 神祇祭祀、⑰ 遣隋使派遣など

これらは推古天皇の執政である。ことごとく委ねてはいない。

対して、皇太子の執政は、

- ⑫ 佛像製作、⑬ 「皇太子親筆作憲法十七條」、⑭ 平帯を着けさせる、
⑮ 法華經講義、⑯ 天皇記などの製作など執政がある。

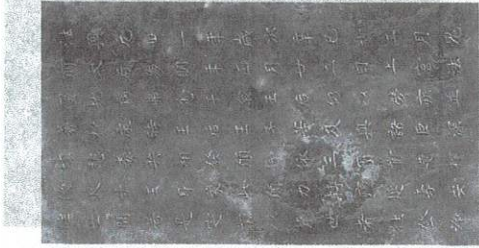
つまり両名で治政が行われている。兄弟統治を、天皇と皇太子の形で記述か？

4、多くの歴史学者が法隆寺釈迦三尊光背銘の上宮法皇を聖徳太子とする。

しかし、そこには推古天皇・厩戸皇子とは異なる倭王の存在が見える。

法興元年廿一年歲次辛巳十二月、鬼前太后崩。明年正月廿二日、上宮法皇枕病弗愈。王食王后仍以劣疾並著於床。時王后王子等、及與諸臣深懷愁毒共相発願。仰依三寶當造釋像尺寸王身。蒙此願力轉病延壽安住世間。若是定業以背世者、往登淨土早昇妙果。

二月廿一日癸酉、王后即世。翌日法皇登遐。癸未年三月中、如願敬造釋迦尊像并侍侍及莊嚴具竟。乘斯微福、信通知識、現在安穩。出生入死、隨奉三王。紹隆三寶、遂共彼岸、普遍六道、法界含識、得脫苦緣、同趣菩提。使司馬鞍首止利佛師造



釈迦三尊光背銘

法隆寺釈迦三尊像

多くの歴史学者が、釈迦三尊元有跋の上宮法皇を厩戸皇子とするが、違つ！
光背銘が描く世界は、『日本書紀』が描く世界と全く合致しない。

『日本書紀』が描く世界では、

- 六二二年二月五日、皇太子厩戸皇子が薨去。
- 六二四年四月、百濟の僧觀勒を僧正とする。
- 六二六年五月、蘇我馬子薨去。
- 六二八年三月、推古天皇崩御。

高麗の僧慧慈が悲しみ設齋する。

仏師の司馬鞍首止利に造らせた。

造像の善業によつて、施主の将来における成仏を願う。

この造像により（過去七仏が共に大切にした戒めの徳目として「悪の行為はせず、多くの善事をするに努め、自らの心を浄めていく」があつて、善業により成仏が適う）、道を信じる知識（造像の施主たち）は、現世では安住を得て、死後はこのお三方に従つて三宝に帰依して悟りに至り、六道を輪廻する一切衆生も苦縁から脱して、同じように成仏できることを祈る。

仏像の完成前に亡くなられた。

六二三年三月に、発願にしたがつて釈迦像および脇侍像、莊嚴の具（光背と台座）を造り終えた。

病気の平癒を願つて造像しようとしたが、

厩戸皇子は六二二年二月五日に死去

しかし、六二三年二月二十一日に王后が崩御し、翌二十日には法皇が崩御された。

（『無量壽經』が説く極楽浄土への往生を願っている。『無量壽經』の思想が一部伝わっている。）

病氣を平癒させ寿命を延ばし安住できるよう願つたものである。もし前世の報いで死が訪れるなら、浄土に登つて早く悟りを開くことを願う。

法興のはじめより（大乗仏教の根本経典である法華経が伝わった年より）三十二年経つた六二二年十二月、鬼前太后が崩御された。翌年正月二十二日に上宮法皇と王食王后

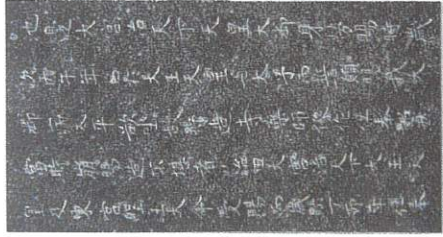
厩戸皇子は法皇でない

右と左は、全く別の世界

法隆寺薬師像は釈迦像だった

もう一つの飛鳥仏法隆寺薬師如来像

光背銘には、法隆寺創建の由来が刻まれている。



地邊大宮治天下天皇大御身努賜時歲
次丙午年召於大王天皇與太子而誓願開我大
御病太平欲坐故將造寺薬師像作仕事然
當時願賜造不堪小治田大宮治天下大王天
皇及東宮聖王大命受賜而歲次丁卯年仕事

用明天皇が病氣の時、
五八六年、推古天皇と聖徳太子
に、平癒のため寺と薬師像を
造るよう願われたが、
果たされないまま崩じられた。
後に、推古天皇と聖徳太子が
大〇七年に、大命を果たした。
釈迦三尊像は六三三年に造られた。

下記の『薬師経』の教えに基づいている。

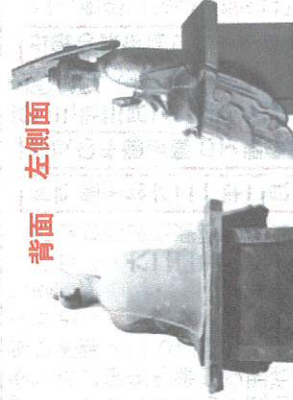
東方がなだに薬師瑠璃光如来がおられる浄瑠璃仏土がある。如来は菩薩修行時に、12の大願を起しその全てを体得した。その5番目の大願「障害・病氣・身体的苦痛を癒す。そして、薬師瑠璃光如来の名を唱え、お姿を供養して、經典を誦讀すれば、願いが満ち悟りに至る。

釈迦三尊像と薬師像は非常に似ている？

なぜ薬師像か？



法隆寺薬師像



背面

左側面



法隆寺釈迦三尊像



背面

左側面

後背銘に薬師像と
書いてあるから。

しかし、刻字の内まで鍍金が及んでいない。
「鍍銅製、表裏共に鍍金、文字の輪郭にタカネによる
メクレがあり、鐫刻内に鍍金は認められない。」
『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』1979年奈良文化財研究所編

- ①光背に七仏レリーフがあるが、
薬師七仏は607年当時存在しない。
707年『七仏経』で初めて薬師七仏が現れる。
釈迦像は過去七仏
- ②薬師像とは言わない。
薬師瑠璃光如来が本来の名称。

法隆寺の再建後に釈迦如来像が持ち込まれ、
その後に『日本書紀』の知識で、
造文刻字され、薬師像に仕立て上げられた。

法隆寺薬師像の光背銘は、707年に漢訳された『七仏経』に基づき、古い釈迦像の光背に『日本書紀』に合うよう刻銘された。

法隆寺薬師像は釈迦像だった

薬師経典の受容

- 現存する古写経で持統朝以前は全て①
- ① 5世紀初頭、東晋の帛戸梨曇多羅訳『はくりみつたら 佛説灌頂拔除過罪生死得度経』『灌頂経』
 - ② 615年、隋の達摩笈多訳『だつまぎゆた 仏説薬師如来本願経』『本願経』
 - ③ 650年、唐の玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德経』『本願功德経』
 - ④ 707年、唐の則天武后の時代、義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功德経』『七仏経』
- 我が国が新訳経典③④を受容したのは文武朝以降。
『飛鳥・白鳳仏教論』1975年雄山閣出版、田村園澄

『灌頂経』では、「東方に瑠璃光と号する仏有り」と出現する。
その名号は、恭敬・供養・誓願成就に直結する。

「薬師瑠璃光如来」10カ所、「薬師瑠璃光佛」16カ所、「瑠璃光佛」18カ所、
「瑠璃光如来」1カ所、「薬師瑠璃光」2カ所、光背銘に言う「薬師(像)」はない。

阿毎多利思北孤を祀る
釈迦三尊像がなぜ法隆寺にあるのか？

法隆寺の創建は607年とされる。

670年「法隆寺災けり、一屋余ること無し」

『日本書紀』のこの記事は、昭和14年の若草伽藍の発掘調査で証明されました。
若草伽藍から出土の瓦は、天王寺創建瓦と同范瓦。
その法隆寺は全焼して、その後には再建された。



法隆寺釈迦三尊像は再建後にどこから持ち込まれた。

法隆寺釈迦三尊像は王朝交代後に天王寺から持ち込まれた？



法隆寺釈迦三尊像

5、(平城京の) 薬師寺東塔擦管銘

藤原京の各伽藍が平城京に復元されている。

平城京の薬師寺は、本薬師寺の主要堂舎の大きさ・伽藍配置までも忠実に再現されていた。

発掘により判明



(平城京の薬師寺) 東塔擦管銘の解説に諸説あったが、解体修理で答えが出た。



- ◆東塔の天井板の伐採年が七二九年・七三〇年、心柱の伐採年が七二九年であった。平城京遷都後の伐採なのだから、少なくとも東塔は遷都後の新築である。
- ◆天平二年(七三〇)三月二十九日始建薬師寺東塔という『七大寺年表』の記述に信憑性があったことが判明した。
- ◆「流記云玉塔四基、一口在本寺」という『薬師寺縁起』より、天平十九年(七四七)本薬師寺にも塔があつた。

平城京薬師寺東塔が移設されたのか新説されたのか諸説乱立
まじまじと解体修理で答えが出た。

平城京薬師寺東塔が移設されたのか新説されたのか諸説乱立
まじまじと解体修理で答えが出た。

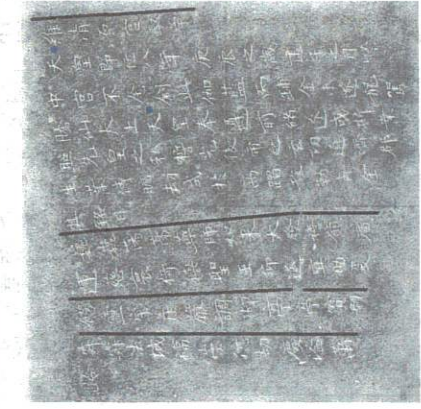
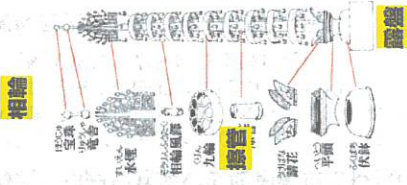
銘の 起草刻入	東塔の 建立年は	移建か 非移建か	学説
文武朝	文武朝	移建	平子鐸嶺
聖武朝	天平2年(730)	非移建	喜田貞吉
文武朝	天平2年(730)	非移建	足立康
文武朝	天平2年(730)	非移建	会津八一
聖武朝初	天平2年(730)	非移建	敷田嘉一郎
文武朝	大宝年間	移建	田村吉永
11世紀	天平2年(730)	非移建	町田甲一

維清原宮殿宇
天皇即位八年庚辰之歲建子之月以
中宮不食創此伽藍而鋪金未遂龍駕
騰仙大上天皇垂遵前緒遂成斯業
照先皇之弘誓光後帝之玄功道濟郡
生業傳曠劫式於高闕勒勅貞金
其銘曰
就緒彌遷藥師如來大發誓願廣
運慈哀綺與聖王仰延冥助爰
飭靈宇莊嚴調御亭亭寶刹
寂寂法城福崇儼劫慶滄萬

- ◆『薬師寺縁起』(1015年)は本薬師寺の塔露盤銘を引用。つまりこの時平城京薬師寺東塔擦銘は無かった。
- ◆嘉保2年(1095)本薬師寺の塔跡より佛舍利を発見『中右記』。1095年には本薬師寺の塔は失われた。

町田甲一氏(武蔵美大名誉教授)は、擦銘の字数不揃い、字画・配字などの不整備、行は曲がり天地揃わず、拙劣な銘文刻入を指摘して、東塔擦銘は塔の完成後に、屋上に上がつて、足場の不安定な状態のもとに、11世紀になってはじめて、本薬師寺の露盤銘を参考に、刻銘されたと推測する。

『道の幸』江戸幕府の祐筆屋代弘賢が(寛政の改革で松平定信の片腕となった)柴野栗山と共に、京都・大和の寺社を訪問した日記、そこに薬師寺の塔に上って擦銘を見たことあります。判読・読みは藤田隆一氏によるものです。



なとおもへど六層の塔上寒風はけければ父母の遺體をばおもはずやなと彦輔ぬのいさめいなきがたくためらひぬれどをたひ來き夢にもあらねば折しも小雨ふり出たれどかのぬにはおもひしなまねんてのぼりぬ。
新羅に案内せよすればまづはしこりまて第二の屋ねに参ある所よりはひ出ぬ。しづきまのぼりて第三の内に入る。これより第六重まではうちにあやしむはいるにすがりつゝかうして車主までのぼりぬ。これは工部が修拂の庭にのぼるとてまぎくはなをばなをなごころ。又はすこしなぞひなるもあり。もとはなをなをなごころ。よりとしてすはを所をくゝりゆく。すていしをきいはんかなし。
六重の屋ねに又参りて下よりふたををしあげ屋のふちを手をかけあいと西をあけて身をもぬけ出ぬれば東にはかすが山・わかくさ山西には生駒がたけなほしとちやかにみへて雨山の麓勢又を是所からなる。かつまたの池はましたにあり。高さ凡そ十六丈。輪見さすはほど有りぞ。
さても九輪の心柱をくゝみて屋の上におほひたるを露盤と

天武九年・六八〇年 十一月
これ清原宮に邸宇天皇の即位八年庚辰の歳子を建つる月、中宮不念^{だうしき}この伽藍を創らんとしたが、鋪金未だとげざるに龍騰騰^{りゅうとうとう}仙^{てんせん}天皇崩御す。
大上天皇前緒に従ひ牽り遂にこの業を成したまふ^{なげざる}。
先皇の諱願を照し後帝の深い功を輝かす。道は郡生を救い、業は永劫に伝わらん。崇高な行いで敢て貞金に刻む。其の銘に曰く、巍巍^{ゑゐ}たり蕩蕩^{たうたう}たり薬師如来大いに誓願を發してひろく慈哀をめぐらし、ああ聖王を仰ぎ眞加を広めん。ここに靈宇をかざり釈尊は莊嚴なり。亭亭たる宝刹寂寂たる法城。福は億劫に高く慶は萬齡にあふれん。
『日本書紀』によると、
①天武九年(六八〇)十一月十二日「皇后体不予 則為皇后誓願之 初興薬師寺、仍度一百僧。由是得安平」と、皇后(後の持統天皇)が病氣になり、皇后の為に誓願して、初めて薬師寺を興し百人の僧を得度させ、これによつて皇后は平癒したとします。
②持統二年(六八九)正月八日、「設無遮大会於薬師寺」と、薬師寺は法会を行えるほどできていたと見えます。
(持統八年十二月六日に藤原宮へ遷居)
③持統十一年(六九七)七月二十九日、「公卿百寮、設開佛眼会於薬師寺」と、ここでも法会を行えるほどできていたと見えます。
『続日本紀』によると、
④文武二年(六九八)十月三日「以薬師寺構作略了、詔衆僧令住其寺」と、明らかに薬師寺の創建がここで完了したように見えます。
⑤大宝元年(七〇一)六月十一日「以正五位上波多朝臣牟胡閑、從五位上許魯倍朝臣陽麻呂 任造薬師寺司」とあつて、④とは異なり、未だ完成前のように見える。
(大宝二年十二月二十二日に持統太上天皇崩御)
⑥大宝三年(七〇三)正月五日「奉為太上天皇、設齋于大安、薬師、元興、弘福四寺」と薬師寺を四大寺の一つとして扱っている。
銘文では誓願が果たす、寺院の完成前に天皇が崩御したような表現ですが、①では平癒したとある。
②③④によると、薬師寺はほぼ完成しているようであるが、銘文では「鋪金未だとげざる」とする。

天武九年・六八〇年 十一月

これ清原宮に馭宇天皇の即位八年庚辰の歳子を建つる月、中宮不念たのしみずこの伽藍を創らんとしたが、鋪金未だとげざるに龍駕騰仙天皇駕騰す。大上天皇前緒に従い奉り遂にこの業を成したまう完成させ。先皇の請願を照し後帝の深い功を輝かす。道は郡生を救い、業は永劫に伝わらん。崇高な行いで敢て貞金に刻む。其の銘に曰く、巍巍ききたり蕩蕩たり薬師如来大いに誓願を発してひろく慈哀をめぐらし、ああ聖王を仰ぎ真加を広めん。ここに靈宇をかざり釈尊は莊嚴なり。亭亭たる宝刹寂寂たる法城。福は億劫に高く慶は萬齡にあふれん

銘文は『日本書紀』が記す天武・持統紀と全く合わない。

- ①清原宮馭宇天皇を、通説では当然天武天皇と見なし、この文章の主語とするが、主語では無く年月を表わしている。
- なお、『日本書紀』によると、天武九年（六八〇）に、皇后（後の持統天皇）が病氣になり、皇后の爲に誓願して、初めて薬師寺を興し百人の僧を得度させ、これによって皇后は平癒したとする。ところが、銘文では誓願が果たなかったような表現である。
- ②中宮が主語、この中宮を通説では持統天皇と見なす。
- 持統は皇后であつて中宮では無い。これは野中寺弥勒菩薩銘にみえる中宮天皇のこと。白鳳元年（六六二）即位の九州王朝の天皇である。
- ③伽藍を創ろうとしたが、鋪金未だとげざるに龍駕騰仙す。
- 通説では、天武天皇が亡くなったのだとするが、そうであればこれは主語が無いおかしい文章である。中宮天皇が亡くなったのである。もし亡くなったのが持統天皇とすると、持統天皇が薬師寺完成前に亡くなったことになるが、持統二年（六八八）薬師寺にて無遮大会をいとなむとあり、「鋪金未だとげざる」の表現は相応しくない。中宮天皇が「鋪金未だとげざる」に崩御したのである。
- ④大上天皇 前緒に従い奉り遂にこの業を成したまう。
- 『日本書紀』『続日本紀』には大上天皇は出てこない、別世界の話だ。中宮天皇を引継いだ大上天皇が伽藍を完成させた。白鳳二〇年（六八〇）に病氣になった中宮天皇が、薬師寺の完成を待たずに、朱雀二年（六八五）に崩御。これを支えた筑紫郡督だった大海人皇子（天武天皇）も相次いで亡くなったのだ。先皇の請願を照し後帝の深い功を輝かす。道は郡生を救い業は永劫に伝わらん。崇高な行いで、敢て貞金に刻む。
- 先皇Ⅱ中宮天皇、後帝Ⅱ大上天皇となる。ここには天武天皇も、持統天皇も、文武天皇も現われない。

『日本書紀』に見える 九州王朝の仏教政策の変遷

- ①推古12年（604）4月3日、十七条憲法制定。「篤く三宝を敬え、三宝とは仏法僧なり。一切の生類の行きてつ所であり、すべての国々の究極の教えである。極悪人は少ない、よく教えれば従ってくれるものである。」
- 『隋書』大業3年（607）多利思北孤の遣使が隋に朝貢して、「海西の菩薩天子が重ねて仏法を興したと聞いたので、遣使を朝拜させ、沙門數十人を送り仏法を学ばせたい。」
- ②推古32年（624）4月13日、觀勒僧（かんろくほうし）を僧正とし、鞍部徳積を僧都、安曇連を法頭とした。（南朝の制にまねた僧侶によって僧尼を統制する制度）
- 『道僧格』貞観11年（637）頃に成立した唐の出家者を取り締まる法律。仏教よりも道教を優位に置く。
- ③大化元年（645）8月8日「十師任命」の詔、僧侶によって僧尼を統制させる制度。「朕もまた、仏教を崇拝し、その大道を広め豊かにしたいと思う」「おおよそ天皇から伴造までが建立する寺で、造営できないものは朕が皆援助しよう」
- 本薬師寺霽盤銘に見えるように、7世紀初頭より、九州王朝は一貫して仏教を擁護してきた。
- ④養老2年（718）養老令選定、この中で僧尼令の26条のほとんどが、僧尼の行動を制限する条項。しかも令では仏寺および僧尼の名籍、供養は玄蕃寮（官僚）が管轄する。

九州王朝の仏教政策